

# 『眺めのいい部屋』における 導き手的人物の役割

The Role of a Mentor and Emancipator in *A Room with a View*

板谷 洋一郎

## 要 旨

E・M・フォスター作『眺めのいい部屋』(1908)最終章で、ルーシー・ハニャーチとジョージ・エマソンは、主として前者の迷いが原因であるが、紆余曲折を経た後、半ば駆け落ち婚という形で結ばれ、二人が出会うきっかけになったフィレンツェのペンション・ベルトリーニに再び滞在していることが語られる。二人が宿泊している部屋は、第1章でエマソン父子が、好意で、ルーシーとその付添人シャーロットと交換した「眺めのいい」二部屋のうち、老エマソン氏が使用していた方の部屋である。さりげない演出ではあるが、このことは、二人が、たとえ結ばれることが痛みを伴おうとも、社会規範や教義より、愛に象徴される個人の関係を重んじるエマソン氏の信条を継承していることを示唆している。この点、エマソン氏が主人公ルーシーに与える影響は注目に値する。本稿では、エマソン氏がルーシーのBildung(成長)に感化を及ぼす導き手的な人物として機能していることを論じる。まず、エマソン氏につながる人物造形を作品の創作過程と社会改革家・思想家エドワード・カーペンターの思想から考え、続いて、作品におけるルーシーの精神的成長をイギリスの教養小説の系譜と比べた後、エマソン氏が導き手的な人物として、どのようにひずみが生じたルーシーの成長の軌道修正を促すかを考察する。こうした議論を展開することで、エマソン氏がその感化的な行動を通じて、ルーシーを混乱から解放し、彼女の自己形成をサポートする導き手になっていることを提示したい。

## キーワード

導き手, 自己形成, 教養小説, エマソン氏 (Mr Emerson),  
エドワード・カーペンター (Edward Carpenter)

## はじめに

E・M・フォースター作『眺めのいい部屋』(*A Room with a View*) (1908) の最終章 “The End of the Middle Ages” で、ルーシー・ハニチャーチとジョージ・エマソンは、正式なものかは定かではないが、夫婦になったことが示唆される。二人は、第1章 “The Bertolini” でジョージの父エマソン氏の提案で、エマソン父子がルーシーとその付添人シャーロット (ミス・パートレット) と交換した「眺めのいい」二部屋のうち、ルーシーがあてがわれた部屋に泊まっている。この部屋は、元はエマソン氏が使っていた部屋である (シャーロットは、若い娘に若い男 [ジョージ] が使っていた部屋を使わせることをいぶかしみ、自らがジョージが滞在していた部屋に泊まる)。若いカップルが、エマソン氏が使っていた部屋に滞在していることを描くことで、小説は二人がエマソン氏の信条を継承する形で生きていくことを暗示している。さらに、細かいことだが、最終章で、ルーシーはジョージの靴下を繕うという家庭的女性像を彷彿とさせる仕草を見せるが、そんなものはどうでもいいと言うジョージに従い、眺めのいい窓際で彼と互いの名前をささやきあう。この小さなやり取りも、二人が情熱を称えるエマソン氏の立場を支持していることを示唆している。作品の主人公ルーシーに焦点をおくなら、最終章で二人の恋人の背後に漂うエマソン氏の影響は、彼がルーシーの変化・成長にある役割を果たした上で、物語から退場したことを窺わせる。

本稿では、エマソン氏がルーシーの *Bildung* (成長) に重要な導き手 (mentor) として感化を及ぼす人物であることを論じる。まず、エマソン氏の人物造形を作品の創作過程と社会改革家・思想家エドワード・カーペンターの思想から考え、続いて、作品におけるルーシーの *Bildung* を教養小説の系譜と比較した上で、エマソン氏がルーシーの精神的成長にどう感化を及ぼしているかを考察する。こうした議論を展開することで、エマソン

氏が、その感化的な言動を通じてルーシーを刺激することで、彼女を混乱から解放し、あるべき自己形成へ導く存在になっていることを提示したい。

## I. 人物造形に見るエマソン氏

### I.1 創作段階における構想

『タイムズ紙文芸付録』に寄せた記事の中で、エリザベス・エテム(Elizabeth Ellem)はフォースターの文書記録から、所々断片的な部分はあるが、『眺めのいい部屋』(以下『眺め』と略す)の前身と思われる二つの草案を見つけ、紹介している。“Lucy”と“New Lucy”の二案である<sup>1)</sup>。“Lucy”は、ペンション・ベルトリーニの上品ぶったイギリス人滞在客が、国教会の資金集めを支援するため、コンサートを開くことが物語の中心となっていて、主人公ルーシーは伴奏者として登場する。エテムによれば、完成版同様、ルーシーはシャーロットに付き添われる旅行者であり、「孤児」と想定されていた<sup>2)</sup>。

「孤児」という設定は、両親という個人にとって最も有力な導き手になりうる人物の不在を示すため、興味深い点かもしれない。エテムが紹介する“Lucy”でルーシーが関わるエピソードから判断するに、彼女は自由を求め、一つの束縛から逃れても別の束縛に捕らわれてしまうというジレンマに陥っていて、その状態は物語の結末まで維持されている(“Lucy”は、主人公の自己探求の行方を留保する形で終わる)。このため、“Lucy”においてルーシーには、よき導き手の人物が不在だと考えられる。しかし、“Lucy”から、“New Lucy”、『眺め』へと連なる創作過程という観点から考えると、完成版の最前身作とされる“Lucy”でルーシーの精神的成長を促す導き手の人物が不在であることは、逆に、後の創作活動における、そのような人物の登場の可能性に余地を残すものとも考えられないだろうか。

一つの可能性は、“New Lucy”に見出すことができる。エテムは“New

Lucy”について紹介する際、フォースターによる章分け案を提示している<sup>3)</sup>。その章分けリストを見る限り、“New Lucy”はフィレンツェを中心にイタリアを舞台とするPart Iと、イングランドを舞台とするPart IIに分けられていることから、プロットの点で、“Lucy”より内容的に完成版に近いものとみなすことができる。この章分け案で興味深いのは、Part IIに含まれる“Ch. 11. Death of Mr. Emerson”という章題である。小説においてマイナーな人物の死が章題になることは考えにくいから、この章題案は、“New Lucy”でエマソン氏が重要な人物として構想されていた可能性を窺わせる。

“New Lucy”の結末は、互いの気持ちを確認したルーシーとジョージが周囲の反対に対し、駆け落ちを考えるも、その実行前にジョージが自転車で強風に倒された木に衝突し、命を落とすという劇的なものだが、エレムによれば、エマソン氏のみが二人の結婚を祝福する設定になっていた<sup>4)</sup>。完成版では、悲劇的な結末は変更されているが、事実上の駆け落ち婚である二人の結婚を肯定的に捉えるのはエマソン氏だけであるため、この点は“New Lucy”から引き継がれている。

より重要なのは、『眺め』でもエマソン氏は他界しているように思えることだ。ルーシーとエマソン氏のクライマックス的な対話を扱う第19章でエマソン氏の衰弱が強調されていることに加え、最終章での若い二人のイタリア滞在自体が、その時点でのエマソン氏の不在を予感させる。その理由は、父思いのジョージが、たとえルーシーとの結婚のためとはいえ、病弱のエマソン氏を一人残してイングランドを後にすることは想像しにくいからである。エマソン氏はルーシーに「……私はジョージがいるところになければならない」と言うが<sup>5)</sup>、最終章の状況を踏まえると、エマソン氏はおそらくすでに他界していて、その言葉はルーシーとジョージの心の中で継続されていると解釈できるだろう。

話を戻すと、二人の関係を唯一祝福したとされるエマソン氏の死が、“New Lucy” 後半の章題として想定されていたことは、彼が物語で重要な役割を担っていることを示唆するため、その死、あるいはその生前の言動が、ルーシー（とジョージ）のその後の選択、つまり、物語終盤の二人の駆け落ちという展開に何らかの影響を与えた可能性を想像させる。“Lucy” から “New Lucy” に至る間にはフォースターの中で創作的な変更・発展があったことは考えられるが、『眺め』の前身となる作品の創作段階で、ルーシーを孤児とする構想や「エマソン氏の死」という章案が見られることは、フォースターがルーシーを創作する過程で、彼女の前に完成版のエマソン氏につながるような導き手の人物を登場させるアイデアを構想していた可能性を示すように思われる。

## I.2 エマソン氏の思想に見るカーペンターの要素

トニー・ブラウン (Tony Brown) は、『眺め』に関する先行研究に見られる、エマソン氏の創作に寄与した存在として、サミュエル・パトラー、そして、ラルフ・ウォルド・エマソン、ヘンリー・デイヴィッド・ソロー、ウォルト・ホイットマンといったアメリカの思想家・詩人を挙げる論とは別の論を提示している。ブラウンは、エマソン氏の創作に関して、フォースターに大きなインスピレーションを与えたのは、イギリスの社会改革家・著述家エドワード・カーペンター (Edward Carpenter) (1844-1929) だと考えている。

カーペンターとの出会いは、「フォースターの人生にあって最も重要な出会いの一つ」とされている<sup>6)</sup>。フォースターがカーペンターに直接会ったのは、彼が最初のインド旅行から帰国した翌年の1913年であるが、おそらく彼は、カーペンター同様自らもそこで学んだケンブリッジ大学のキングス・カレッジの有力人物たち（ゴールズワージー・ロウズ・ディキンソンやナサ

ニエル・ウェッドら)からカーペンターの著作について聞き知っていた<sup>7)</sup>。カーペンターは、ケンブリッジ大学で学んだ後、聖職者として叙任されるも、その職業は自分の内なる声が求めるものではないと悟り、「教会、正統派的慣習、中産階級的の価値観」をすべて棄て去り<sup>8)</sup>、労働者とともに暮らし、教義的で抑圧的な生活からの解放を求め、自由と平等に基づく生活を提唱した。カーペンターに関するこれらの伝記的事項は、どこかエマソン氏を彷彿とさせる。ジャーナリストであるエマソン氏は、肉体労働者ではないが、『眺め』に登場する主要人物たちの属する中流階級より下の下層中流階級に属し、物語を通して、宗教的で霊的な教義に懐疑的な人物であり、シャーロットやビーブ牧師に「社会主義者」とみなされている<sup>9)</sup>。

ブラウンによれば、カーペンターの著作、特に『民主主義に向けて』(*Towards Democracy*) (1883) や『愛の成人』(*Love's Coming-of-Age*) (1896) は、ソーヤーやホイットマンの思想を部分的に吸収していることに加え、フォースターはこうした著作に、地元イングランドの郊外に暮らす面々のヴィクトリア朝的上品ぶり・体面重視の姿勢に対する(批判的)応答、そして、同性愛をも含む、男女のセクシュアリティの解放を見出している。実際、フォースターのカーペンターに対する受容的な姿勢は、『眺め』では描写が見られない同性愛を除けば、エマソン氏の思想に織り込まれているように見える。例えば、エマソン氏の信条には「肉体」に対する羞恥心の克服が含まれるが、そこにはカーペンター的思想が読み取れる。エマソン氏は、ルーシーの弟フレディが、ビーブ牧師に付き添われる形で、初対面のジョージを気さくに水浴びに誘う場面(第12章“Twelfth Chapter”)で、肉体に関する自らの考えを披露する。彼は、男女が等しく「肉体」を敬遠することを止めれば、私たちはエデンの園に入ることができると言う。これは、『民主主義に向けて』でカーペンターが、肉体は恥じたり、分厚い衣服で覆ったり、会話の席で控えるものでもないとする見解と類似している<sup>10)</sup>。エマソ

ン氏とルーシーの対話については後ほど検討するが、上記の場面で、カーペンターの思想を想起させるような調子でエマソン氏が唱える肉体の解放によるエデンの園への入場は、『眺め』でルーシーが自らの内に目覚めた性的な感情に素直になることで、ジョージと彼女の関係が達成されることを予期させるため、ルーシーの自己形成に影響する思想だとみなすことができる。

フレディがジョージを水浴びに誘う場面でのエマソン氏の発言には、肉体の解放に加え、男女の平等という、もう一点重要な視点が含まれている。エマソン氏は次のように言う。「ほかのことはともかく、これ[肉体に対する姿勢]に関しては男の方が進んでいます。男は女ほど肉体を軽蔑しませんからね。だが男女が同志になってはじめてエデンの園に入れるのです」<sup>11)</sup>。ブラウンによれば、エマソン氏の説く男女の同志・友愛関係は、“Lucy”にも“New Lucy”にも見られず、完成版にしか見られない概念である。ブラウンは、このことにもフォースターのカーペンターに対する反応が関係しているともなし、カーペンターが『愛の成人』で男女の平等について触れている箇所を挙げている。そこで、カーペンターは、現代の女性は、結婚に情熱だけでなく、友愛をも求めるようになってきていると述べている<sup>12)</sup>。エマソン氏の発言で肉体を蔑むのを止めることを促される対象に現代の女性も含まれると考えるなら、エマソン氏の発言は、カーペンターの言葉のパラフレーズにさえ思えてくる。

加えて、男女の平等という概念は、『眺め』におけるジョージのルーシーへの告白場面(第16章“Lying to George”)を思い起こさせる。そこでは、ルーシーとの対話(シャーロットも同席)で、ジョージがセシルに見る中世から現代にまで残る男性優位の概念を喝破して、彼女に自分と結ばれるようにと迫る(ルーシーはその時点では彼の手を取らない)。自らが思う通りに女性を支配しようとするセシルよりも、自分はずっとよい形でルーシーを愛す

ると言うジョージは、「僕は、腕のなかに君を抱いているときでも、君には自分自身の考えを持っていて欲しい」と話す<sup>13)</sup>。短い言葉ではあるが、ここには、エマソン氏とカーペンターが共通して提唱する愛における情熱（「腕のなかに君を抱いているときでも」と友愛・平等（「君には自分自身の考えを持っていて欲しい」）の共存が表現されている。

さらに、読者は、続く章でルーシーがセシルに自分が彼との婚約を破棄した主な理由として、ジョージが披露したセシル評をほぼ趣旨を変えずにパラフレーズして持ち出すことから、ジョージの発言がルーシーの心に響いたと想像できる。確かに、男女の愛における情熱と友愛の融合に連なる言葉をルーシーに聞かせたのはジョージだが、彼の発言は彼の父であり人生の師でもあるエマソン氏の思想を反映していると解釈することも可能だ。実際、前述のフレディがジョージを水浴びに誘う場面で、エマソン氏は「男と女が同志の関係になるのは確かです。ジョージもそう思っていますよ」と述べているため<sup>14)</sup>、ルーシーはエマソン氏の忠実な弟子であるジョージの口を通して、エマソン氏（とカーペンター）が現代の女性が求めるべきだとする愛における男女の平等の思想を聞いていると解することができる。この時点では、ルーシーはまだ肉体（ジョージに対して感じる情熱）を無理に蔑んでいるため、ジョージの言葉に耳を貸そうとしない。しかし、情熱と友愛を併せ持つ男女関係は、後で、ルーシーがエマソン氏との最後の会話で強く促されて、ジョージとの関係に見出すものであることを考えるなら、カーペンター的な思想は、フォースターが、ルーシーを彼女が心の深奥で求める男女関係に導く助言者として、エマソン氏を創造することに大きく寄与したと考えられるだろう。

## II. イギリスの教養小説とルーシーの Bildung

イギリスの教養小説に関する研究書で、川本静子は、イギリスにおける

教養小説の登場に至る歴史的流れを概観している。彼女によれば、イギリス小説の発展の一つの流れは、物語の主要な舞台となる社会にとってのアウトサイダーであるピカロが登場するピカレスク小説が、主に1830年代から1840年代に隆盛した、産業社会におけるひずみを訴え、社会体制のあり方を問う社会小説へと発展し、そして、社会的動乱がやや落ち着いた1850年代から次々と書かれた個人の人間形成を追求する教養小説の登場として捉えることができる。これを念頭に、川本は『デイヴィッド・コパフィールド』（1850）を代表とする小説群が書かれた1850年代をイギリスにおける教養小説の勃興期と考えている<sup>15)</sup>。

これに対して、リチャード・サーモン (Richard Salmon) は、教養小説と19世紀イギリス小説を扱う論の中で、川本とは別の論を展開している。サーモンによれば、教養小説というジャンルの原型的テキストについては様々な議論があるが、イギリスにおける教養小説の発展には、1824年のトマス・カーライルによるヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテの『ウィルヘルム・マイスターの修業時代』（1795-96）の英語訳の刊行、そしてカーライル自身の『ウィルヘルム』的形式への応答とも解せる作品『衣装哲学』(Sartor Resartus) (1833-34) が、イギリスにおける教養小説の多様な分岐の発展につながったと論じている。男性主人公が登場するイギリスの教養小説のみを対象としている川本に対し、野心的に作家の性別、主人公の性別を問わず19世紀全体に書かれた教養小説を対象とするサーモンの包括的な視点を鑑みると、イギリスにおける教養小説の勃興期は、サーモンが提起するカーライルのゲーテ訳が刊行された1824年以降、とりわけ、『ウィルヘルム』的な徒弟が登場する小説が多く書かれた1830年代から1840年代とする方が無難であろう。

19世紀のイギリス教養小説をほぼ年代ごとに検討していく中、サーモンは『眺め』と時期的に近い1880年代と1890年代の「女性を扱う教養小説」

群の登場を論じる際、それらの小説における「女性の自己発展」は<sup>16)</sup>、家庭という領域や自己否認という行動で頂点に達するのではなく、専門職への渴望とその専門職業の実践の中で主人公が直面する葛藤を通して達成されるものだと述べている。

これら19世紀最後の20年間に書かれた「女性を扱う教養小説」の特徴を、ルーシーの経験と比較してみたい。まず、「家庭」を女性が家庭的な妻になるという意味で捉えるなら、ルーシーは、シャーロットが考えるような家庭に入り夫を支え、自ら行動を起こすようなことは控える女性像を求めている。これは、彼女が、婚約者の自由意思を顧みず、相手を芸術作品のようにみなし、自分の理想とする型にはめ込もうとするセシルを最終的に拒絶することからも読み取れる。この点、ルーシーは、サーモンが提示するモデルの女性主人公と重なる。また、「自己否認」はルーシーに見られるが、それは彼女の精神的な成長でなく、逆に停滞につながっている。彼女にとっての自己否認とはジョージへの思いをないものとして否定する行為であり、それは彼女の中で理性と感情、精神と肉体の相克を助長するだけで、危機的に人生に対する幻滅感を強めてしまうため、自己否認を彼女の自己形成の頂点とみなすことは難しい。この点でも、彼女の経験はサーモンのモデルと一致する。

しかし、サーモンの挙げる職業の追求という帰着点は、ルーシーの経験には当てはまらない。ルーシーは、前述した『眺め』の前身である“Lucy”からすでに伴奏者として想定されていて、完成版でもピアノ演奏者という特性を付与されているが、『眺め』で彼女は音楽を職業として追求することはないため、サーモンが1880年代から1890年代の「女性を扱う教養小説」に見る「現代的な職業熱」は<sup>17)</sup>、ルーシーの自己形成とは関連付けられていない<sup>18)</sup>。

『眺め』でルーシーの自己形成につながる「新しい女性像 (“New Woman”

figure”）」は<sup>19)</sup>、ハニチャーチ夫人が想像する結婚を絶対の選択肢とせず、社会変革運動に参加するような女性ではなく、ルーシーがエマソン氏の感化に応える形で示す情熱と平等（友愛）を併せ持つ結婚を求める女性に象徴されるものではないだろうか。

夫人の（活動家的な）新しい女性への不安は、フォースター本人のものであるかもしれない。フォースターは直接的な表現は使っていないが、夫人の言う「扇動して、わめいて、足をばたばたさせながら、警察に連行される」女性は<sup>20)</sup>、熱狂的な婦人参政権活動家を連想させる。1907年4月頃から『眺め』につながる草稿に再び取り組んでいたフォースターは、世間で大きなうねりとなっていた婦人参政権運動を知っていたはずである。フォースターにとって、活動家的な「新しい女性」たちは「使命」に殉ずるあまり半ば愛を犠牲にしているように見えたのかもしれない<sup>21)</sup>。異性愛が後退するような社会では、自らが密かに希求していた同性愛など望むべくもないため、彼には夫人がイメージするような「新しい女性」が闊歩する社会は受け入れることが困難であったと思われる。夫人が懸念するような活動家的な女性にならずとも、婚約を破棄したルーシーは、体面を保つため、本当に愛する相手とも距離をおき寡婦的な存在となることで、結婚をせず独立した女性のイメージを一時的に帯びることになる。この点、セクシュアリティの解放に平等（友愛）の概念を掛け合わせたカーペンター的な思想は、ルーシーに「自らの自然な感情への正直さ」と<sup>22)</sup>、彼女が密かにパートナーに渴望している平等（「[彼女は]自分が愛する男の傍らで対等であることを望む反抗者だった」）の両方を実現する機会を与えるものであるため<sup>23)</sup>、フォースターにとって、女性主人公の自己形成の帰着点として受け入れやすいものだったと考えられる。

このように二重の意味を帯びた愛を達成することが、ルーシーにとっての自己形成につながると言えるだろう。しかし、その進捗は鈍重である。

彼女自身が、その進捗に摩擦をかけているからである。彼女は、自らに深く根付いている淑女ぶった行動規範、とりわけ、男女関係における禁欲主義に囚われ、イタリアの解放的な雰囲気で感得した情熱を自然なものとして内面化することを無理に拒絶しようとする。このように自らの内に堰を築いて、自身のBildungを停滞させてしまうルーシーの心にくさびを打つ存在がエマソン氏である。エマソン氏がその言動を通して、いかにルーシーを感化して、その内面の堰を決壊させるかを次に考えたい。

### Ⅲ. エマソン氏の感化的言動

第16章冒頭、ルーシーがゆがんだ形で「成長していた」(“developed”)ことが示唆される<sup>24)</sup>。語り手は、前章の最終場面でジョージに二度目のキスをされた後、ルーシーが一時的に再びたきつけられた情熱に陶醉し、恍惚となるも、今や理性の力で自らに自然に湧き上がる感情を抑え込むことができるようになっていたことを伝える。ルーシーにとって、彼のキスによって再び目覚めた情熱を「神経衰弱」とみなし<sup>25)</sup>、無理に抑え込もうとすることは、自らの真実をないがしろにする行為である。実際、彼女は「真実を自ら歪め、かつて真実があったことさえ忘れてしまった」と描かれている<sup>26)</sup>。真実の改変とは、彼女が心の中でセシルとの婚約を持ち出し、ジョージの存在は自分にとって何でもなかったと言い聞かせることで、自らを自己暗示にかけることである。自らを欺くための自己暗示は、D・H・ロレンスの短篇「牧師の娘」(“Daughters of the Vicar”) (1914) のメアリーを連想させる。同篇で、メアリーは家計を助けるため、人間的な感情が欠けた牧師と結婚するにあたり、自らに対して、自分は肉体的な感情を棄てただと何度も言い聞かせることで、自らを自己暗示にかけようとする<sup>27)</sup>。該当場面で、ロレンスは、メアリーの試みが内的な葛藤を引き起こしていることを忘れずに描写している。ルーシーの場合、自己暗示による真実の否

定は、彼女に「虚偽の鎧」をまとわせ<sup>28)</sup>、ついには、誰とも結婚できない状況に陥らせる。自己形成の観点から考えると、「虚偽の鎧」が招くのは、ルーシーにとって破滅であり、それは成長のひずみとも解釈できる。このようなひずみを修正する契機を彼女に与え、「精神的な闇」から引き上げる存在が<sup>29)</sup>、エマソン氏である。

エマソン氏の導き手的な影響力が際立つ形で描かれるのは、第19章“Lying to Mr Emerson”である。そこで、アラン姉妹とのギリシア行きがいよいよ迫る中、ルーシーは、ビープ牧師が住まう牧師館でエマソン氏と最後の対面をする。会話の前半、エマソン氏は、自らが「情熱こそ正気だ」と教えたジョージによる突然の告白・求婚について謝罪し<sup>30)</sup>、その試みの失敗の結果、息子が「だめになっている」ことを告げ<sup>31)</sup>、息子の悲観には自らが彼を洗礼しなかったことが起因している可能性を吐露し、今やルーシーの近くに住むことに耐えられない息子とともにロンドンに行くことを告げる。

会話の展開に変化が生じるのは、礼拝から一時戻ってきたビープ牧師が、エマソン氏にルーシーは、セシルとではなく、アラン姉妹とギリシアに行くのだと思わず告げた後である。注目すべきは、意を決してギリシアにはセシルが同行しないことをエマソン氏に話すルーシーが、相手を崇敬の念で見ている点である。作品序盤からルーシーには、直感でエマソン氏（とジョージ）を肯定的に見る傾向が見られるが<sup>32)</sup>、ここで彼女はおそらく人生の最期を迎えているにもかかわらず、威厳を保ち、これまでの過酷な経験にさえ穏やかな姿勢を維持しているエマソン氏に、「使い古された男女の騎士道精神ではなく、すべての若者が年配者に示す真の騎士道精神」でもってエマソン氏に接する<sup>33)</sup>。若者が年配者に向ける敬いの念は、人生経験の未熟な者が経験豊富な者を師と仰ぎ、その助言を求めようとする姿勢とも読めるため、ルーシーにそうした念を感じさせるエマソン氏には、導き手的な側面があると言える。

この後、二人の対話は、まるで「真の騎士道精神」を体現するかのよう  
に、迷える若者（ルーシー）とその者に道を説く年配者（エマソン氏）の対  
話として展開していく。ギリシア行きを婚約解消と結びつけるようなルー  
シーの説明に疑念を感じるエマソン氏は、彼女に「混乱」や「自らを見失  
うこと」を意味する“muddle”の危険性を説く<sup>34)</sup>。エマソン氏は、ルー  
シーに、自責の念も込めて、“muddle”に陥ることは人生で死や運命よりも  
恐ろしいことだと話し、ジョージに教えてきたことも自らを欺かないこと  
（“[B]eware of muddle”）だったと伝える<sup>35)</sup>。作品におけるキーワードの一つ  
と言える“muddle”をめぐるエマソン氏の一連の発言は、読者にサンタ・ク  
ローチェ教会を舞台とする第2章後半における二人の会話を思い起こさせ  
る。そこでエマソン氏は、次のように言っている。「昨晚のこと [眺めのい  
い部屋をめぐるやり取り] から判断するに、あなたには自分を見失う傾向が  
あるようだ」（“You are inclined to get muddled, if I may judge from last night.”）<sup>36)</sup>。  
この直後、エマソン氏がルーシーに「思い通りに行動すべきです」（“Let  
yourself go.”）と助言することや二つの章におけるルーシーとエマソン氏の  
会話が教会と牧師館という聖なる場所で行われることを考慮すると<sup>37)</sup>、二  
つの章におけるルーシーとエマソン氏の会話はパラレルを形成している  
とも読める。このパラレルが示唆するのは、二人のサンタ・クローチェ教会  
での対話から牧師館でのハイライト的対話に至るまでの間、“muddle”を  
めぐる葛藤がルーシー（の「成長」）にとっての試練、あるいは苦難であっ  
たことである。

“Muddle”の危険性を説きながら、啓示を受けたかのように、ルーシー  
の婚約破棄は彼女がジョージを愛しているからだと言うことで彼女の心の  
堰を砕くエマソン氏は、伝道者のように、彼女の進むべき道を説こうとす  
る。エマソン氏は、ルーシーが「虚偽の鎧」、つまり、フィンケルシュタイ  
ンの言う「フェミニスト的な主張」<sup>38)</sup>を脱ぎ捨て、ジョージと結ばれるこ

とで見出すことができるものとして、「優しさ、友情、詩」（“the tenderness, and the comradeship, and the poetry”）を挙げる<sup>39)</sup>。「優しさ」は例えば、ジョージがルーシーを気遣って、血で汚れた絵の写真をアルノ川に捨てることや一度目のキスのことについて父にさえ黙っていたことと結びつけることができる。「詩」については、直後のエマソン氏の言葉から、愛の永遠性を象徴していることが読み取れる。興味深いのは、「友情」、あるいは友愛である。すでに考察したように、ここでエマソン氏がルーシーとジョージの結婚で提示しているのは、エマソン氏の人物造形に影響したと考えられるカーペンターの提唱する男女関係、つまり、愛と友愛・平等に基づく男女関係に近いものである。グレゴリー・キャッスルも、ここでエマソン氏は、息子の自己形成の完遂を望む父権者としてルーシーにジョージとの結婚を求めているのではなく、結婚によって、二人が等しく互いの愛に報いることができるという信条があるため、そのような要請をしているのだと指摘している<sup>40)</sup>。また、エマソン氏は、次第に自らの弁舌に熱中し、その言葉は抽象性を増すが、それはルーシーに深く響いていることが次の比喩的な描写から読み取れる。「……彼が話すにつれて、一枚一枚覆いを剥がすように、闇が引いていき、彼女は自らの魂の底を悟った」<sup>41)</sup>。ここでは、ルーシーが自らの真実（ジョージへの愛）を隠すために重ねてきた虚偽が何層にも重ねた覆いになぞらえられていて、エマソン氏の言葉の持つ力が、そのとばりを一枚一枚剥がして、彼女を闇から引き出すイメージが喚起されている。このようにして、エマソン氏は、一時カーペンターがフォースターに発揮した「伝道者や予言者から生ずるような感化力」でもって<sup>42)</sup>、ルーシーを彼女にとっての真実への「自覚」に導き<sup>43)</sup>、彼女の自己形成におけるゆがみの修正に寄与し、彼女を精神的な闇から解放する役割を担っている。

## おわりに

教養小説の一般的な特徴を「個人の願望と社会的同調の要求を調和させる」こととするなら<sup>44)</sup>、『眺め』でフォースターの描くルーシーの自己形成はその形式からやや逸脱している。彼女の成長は、自らが生まれ育った社会との和解ではなく、逆にその求めが彼女にとっての束縛でしかないと認め、そこから自由になる(脱出する)ことで進む形をとっているからである。本稿での議論を踏まえると、その過程に大きく寄与するのは、社会規範や男女関係のステレオタイプにむやみに流されず、個人関係を重視するエマソン氏の人となりであり、彼の平等の理念に基づくヒューマンスト的信条と言えるのではないだろうか。この点において、エマソン氏はルーシーにとって導き手の役割を果たしている。

### 付記

『眺めのいい部屋』の日本語訳は、西崎憲／中島朋子訳(ちくま文庫, 2001年)を適宜参考にしたが、一部変更した箇所もある。

### 注

- 1) エレムによれば、“Lucy”には、“The Concert”というプロット要約が存在し、その流れはある程度“Lucy”に沿っているが、相違点もある。Ellem, Elizabeth, “The Lucy and New Lucy Novels—Fragments of Early Versions of *A Room with a View*”, *TLS*, 28 May 1971, p. 623を参照。
- 2) Ellem, Elizabeth, “The Lucy and New Lucy Novels—Fragments of Early Versions of *A Room with A View*”, *TLS*, 28 May 1971, p. 623.
- 3) *Ibid.*, p. 624.
- 4) *Ibid.*, p. 624.
- 5) Forster, E. M., *A Room with a View*, Introduction by Wendy Moffat, Penguin, 2018, p. 185.
- 6) King, Francis, *E. M. Forster*, Thames and Hudson, 1988, p. 56.

- 7) Brown, Tony, "Edward Carpenter, Forster and the Evolution of *A Room with a View*", *English Literature in Transition 1880-1920*, vol. 30, no. 3, 1987, pp. 280-281. / King, *op.cit.*, p. 56.
- 8) King, *Ibid.*, p. 57.
- 9) Forster, *op.cit.*, p. 8.
- 10) Brown, *op.cit.*, p. 287.
- 11) Forster, *op.cit.*, p. 117.
- 12) Carpenter, Edward, *Love's Coming-of-Age*, George Allen and Unwin, 1918, p. 116.
- 13) Forster, *op.cit.*, p. 155.
- 14) *Ibid.*, p. 117.
- 15) 川本静子『イギリス教養小説の系譜—「紳士」から「芸術家」へ』, 研究社, 1973年, 17-20頁。
- 16) Salmon, Richard, "The Bildungsroman and Nineteenth-Century British Fiction," *A History of the Bildungsroman*, edited by Sarah Graham, Cambridge UP, 2019, p. 82.
- 17) *Ibid.*, p. 82.
- 18) 女性の専門的職業の追求に関して、『眺め』でそれに相当するのは、ミス・ラヴィッツシュだが、彼女はルーシーの個人的な経験を題材にして通俗的な小説を描く人物として、作品では揶揄されている。
- 19) Salmon, *op.cit.*, p. 82.
- 20) Forster, *op.cit.*, p. 180.
- 21) *Ibid.*, p. 180.
- 22) Brown, *op.cit.*, p. 287.
- 23) Forster, *op.cit.*, p. 103.
- 24) *Ibid.*, p. 150.
- 25) *Ibid.*, p. 150.
- 26) *Ibid.*, p. 150.
- 27) この点については、次の拙論を参照されたい。Itaya, Yoichiro, "A Narratological Approach to D. H. Lawrence's 'Daughters of the Vicar'", *Journal of The Institute of Cultural Sciences (Jinbunken Kiyō)*, No. 94, 2019, pp. 82-83.
- 28) Forster, *op.cit.*, p. 150.
- 29) Sullivan, Zohreh T., "Forster's Symbolism: *A Room with a View*, Fourth Chapter", *Journal of Narrative Technique*, no. 6, 1976, p. 222.
- 30) Forster, *op.cit.*, p. 183.

- 31) *Ibid.*, p. 184.
- 32) Finkelstein, Bonnie B., “Forster’s Women: *A Room with a View*”, *Literature in Transition 1880–1920*, no. 16, 1973, pp. 279–280.
- 33) Forster, *op.cit.*, p. 187.
- 34) *Ibid.*, p. 188.
- 35) *Ibid.*, p. 188.
- 36) *Ibid.*, p. 25.
- 37) *Ibid.*, p. 25.
- 38) Finkelstein, *op.cit.*, p. 284.
- 39) Forster, *op.cit.*, p. 189.
- 40) Castle, Gregory, “The Modernist Bildungsroman”, *A History of Bildungsroman*, edited by Sarah Graham, Cambridge UP, 2019, p. 157.
- 41) Forster, *op.cit.*, p. 189.
- 42) King, *op.cit.*, p. 57.
- 43) Forster, *op.cit.*, p. 179.
- 44) Graham, Sarah, Introduction, *A History of the Bildungsroman*, edited by Sarah Graham, Cambridge UP, 2019, p. 1.

#### 参考文献

- Brown, Tony. “Edward Carpenter, Forster and the Evolution of *A Room with a View*.” *English Literature in Transition 1880–1920*, vol. 30, no. 3, 1987, pp. 279–300.
- Carpenter, Edward. *Love’s Coming-of-Age*. George Allen and Unwin, 1918.
- Castle, Gregory. “The Modernist Bildungsroman.” *A History of Bildungsroman*, edited by Sarah Graham, Cambridge UP, 2019, pp. 143–173.
- Ellem, Elizabeth. “The Lucy and New Lucy Novels—Fragments of Early Versions of *A Room With a View*.” *TLS*, 28 May 1971, pp. 623–625.
- Finkelstein, Bonnie B. “Forster’s Women: *A Room with a View*.” *Literature in Transition 1880–1920*, no. 16, 1973, pp. 275–284.
- Forster, E. M. *A Room with a View*. Introduction by Wendy Moffat, Penguin, 2018.
- Graham, Sarah. Introduction. *A History of the Bildungsroman*, edited by Sarah Graham, Cambridge UP, 2019, pp. 1–9.
- Itaya, Yoichiro. “A Narratological Approach to D. H. Lawrence’s ‘Daughters of the Vicar’”, *Journal of The Institute of Cultural Sciences (Jinbunken Kiyō)*, No. 94,

2019, pp. 75-98.

King, Francis. *E. M. Forster*, 1978. Thames and Hudson, 1988.

Salmon, Richard. "The Bildungsroman and Nineteenth-Century British Fiction." *A History of the Bildungsroman*, edited by Sarah Graham, Cambridge UP, 2019, pp. 57-83.

Sullivan, Zohreh T. "Forster's Symbolism: *A Room with a View*, Fourth Chapter." *Journal of Narrative Technique*, no. 6, 1976, pp. 217-223.

川本静子『イギリス教養小説の系譜—「紳士」から「芸術家」へ』研究社, 1973年。

